「史跡外国宣教師宿舎跡」の碑が建っている。

2　神奈川の宋興寺　神奈川区幸ヶ谷にあり、シモンズの宿舎　ヘボン施療所となった。最近整備され、ヘボン博士顕彰会で建てられた石碑がある。

3　居留地三九番跡　中区山下町、テレビ神奈川の隣、法務省横浜合同庁舎前　ヘボン診療所、夫人の英学塾、ヘボンが20年住み、出版、翻訳、教会設立準備場所

4　ヘボン最後の居住地　港の見える丘公園から大仏次郎記念館を過ぎ、韓国領事館を右折したところに「ヘボン山手家族寮」がある。ヘボンが十年住んだ居住地で、聖書の翻訳をしたり明治学院へ通ったところである。門柱のプレートにその旨が記されている。

5　明治学院戸塚キャンパスのヘボン胸像　白金の明治学院原型から製作したもので平成四年除幕式。

6　福浦の横浜市立大学部情報センター入口　沢村田之助に義足を装着する様子を信楽焼きの陶板に描いた美しい浮世絵が飾られている。

7　指路教会　中区尾上町六丁目ヘボンが最後に関与した教会、米国の母教会　Shiloh Churchから取った名で「シロ」は「平和の主」の意味である。一八九〇年（明治二十三）十月定礎式。一八九二年六月教会献堂式。十月十五日同教会でヘボン夫婦送別会。ヘボンは前半は日本語で、後半は英語で挨拶。三十三年前ニューヨークを出発したときより今日日本を離れるほうがはるかに辛いという意味を述べた。十月二十二日ゲーリック号で横浜出帆、帰国の途につく。

高谷道男著　人物叢書『ヘボン』によれば、「眼科医であったヘボンは、施療によって日本人の肉眼を開き、辞書によって日本人の知識の眼を開き、聖書の翻訳によって、日本人の霊性の眼を開いた」と述べている。

（平成八年十一月例会）

江馬式蒸気風呂と薬草

中西淳朗

美濃大垣の蘭方医・江馬蘭斉は、十八世紀に蘭書バルベッティ・アベリウスよりヒントを得て蒸気風呂を考案し、梅毒の治療に使用したと伝えられている。養子の元弘松斉が文政から天保年間にかけて、両国薬研堀に江馬式蒸気風呂を作り、門人の神田紺屋町の荻野立斉に使用法を教えて開業せしめたという。

このような話が大垣に残っている割に、この風呂のことは関東ではあまり知られていない。

この風呂の全体外観図は、藤浪剛一氏の『東西沐浴史話』の口絵に収載されている。構造は酒樽の蓋をぬき、さかさに互いに組み立てた三段重ねの円柱状の湯槽となっている。一番下の樽が五右衛門釜の上にのる形になっており、そこから

蒸気が立ちこもり上の樽へ上昇していく。中樽のところに患者が腰かけで坐れるようになっている。全体の高さは二四九センチ、樽の接合部は上が七四、下が七六センチである。（内藤記念くすり博物館のご教示による）

このような蒸気風呂を作るヒントとして、才一に「らんびき」の構造図を、才二に梅毒における水銀燻蒸法の図を予想しつつ、バルベッティ・アベリウスの著書を探求した。

昭和五十三年編の『東京大学総合図書館古医学書目録』。片桐一男氏調査の『京都大学図書館所蔵蘭書目録』。宮下三郎氏調査の「日本語に翻訳された蘭文医書の目録」、昭和五十一年調査の「江馬文書目録」に眼を通したが発見出来なかった。また岐阜県歴史資料館、友人の江馬　恭（八代目に当る）医師にも問合せたが存在を確認できなかった。

岐阜県の白木　茂氏が述べている如く、〝東京帝大に寄贈された江馬家の蘭書は、関東大震災で焼失した〟ので、バルベッティなる書はその中に含まれていて、平成八年現在、存在しないと考えられる。従って、ヒントになるような図については不明である。

江馬蘭斉による晩期梅毒の治療について、青木一郎氏が次のようにまとめている。

A．蒸気風呂（蒸気浴）

B．内服剤（蜀葵根、大黄、硫酸曹達、甘草を処方）

C．蒸気風呂を利用した全身薬浴（蜀葵根、甘草を用うるも用量不明）

D．局所薬浴（蜀葵根、カミツレを処方）

E．赤降膏の外用（特に潰瘍性病変に）

一覧するに蜀葵根が目につく。これはタチアオイの根で、元来はビロウド葵の代用品である。粘液多糖類が多いので和紙を作る際に用いられたが、中国では薬用としない（中国で葵と書くときは、冬葵子＝フユアオイの種をさす）。二ヶ月前、中国・成都の蓮花池生薬市場を訪問し、漢方でいう葵と、蘭方でいう葵とは異ることを知見した。

蘭方での蜀葵の利用はカスパルの軟膏十七方の中にもみられ、楢林宗建、吉田長淑らが発汗剤、緩和剤として梅毒に用いている。江馬蘭斉の治療は当時としては合理的である。

（平成八年十二月例会）

懸田克躬先生のこと

岡田靖雄

わたしは学生からインターンの時代に加藤正明氏（当時国立国府台病院→国立精神衛生研究所）に兄事しており、つれていかれて先生にもお会いし、先生を兄貴分の兄貴分と感じていた。また、川上武さんが中心でつくった『医療社会化の道標』（一九六九年）に先生の名が二か所にでてくることから先生への関心をつよめた。精神科医療史研究会は一九九一年九月七